

現象世界に必然偶然と自由とがある その 6

「蝶の雑記帳 139」の 6

2.5 カントの宇宙論的的理念の体系

IV 「現象の現実的存在に関して現象一般の依存の全体性に関する宇宙論的的理念の解決」

この表題は、ここまで議論をまとめ、現象の全体性に関して宇宙論的的理念を決定づけて示す、と告げている。つまりこの項は、ここまでカントが展開してきた哲学的な世界観に全体性を与えるように整理したものと見てよいだろう。重要な論点のくりかえしがあるだろうが、正確を期し要点を確認するためにも、カントの言っていることをまた引用しながら考えよう(III.3ηで示したわたしの考えは、描いておこう)。

この項は次のように語り出される。

(01)——我々は前項[III]において、感覺界における変化を考察した。そしてそれは力学的系列をなすものとしての変化であった。この系列においては、いかなる変化もその原因としての他の変化に従っているのである。しかし状態のかかる系列は、今度の場合には一切の変化の最高条件であり得るような或る現実的存在、即ち必然的存在者に達するために手引きとして我々に役立つにすぎない。この項で論及するのは、無条件的原因性ではなく、実体そ

のものの無条件的実在である。それだから我々がここで問題にするところの系列は、実に概念の系列であつて直感の系列ではない、直感の系列においてなら、一つの直感が他の直感の条件をなすだけである。

しかし次の二条件は極めて明白である、即ち—— 現象の総括[自然]における一切のものは変化を免れ得ない、従ってまたその現実的存在に関して条件付きである、それだから凡そかかる依存的な現実的存在の系列においては、無条件的な項、即ちその実在が絶対的に必然的であるような項は決して存在し得ない、—— それだからもし現象が物自体であるとするならば、現象の条件と現象付きのものとが常に直感の同一系列に属するのは必定であり、従ってまた感覺界における現象の現実的存在の条件としての必然的存在者なるものは決して存在し得ないだろう、ということである。

第III項でわたしは、カントの認識理論の「人間の認識能力は、現象の範囲に限られ、無条件的なあるいは絶対的な原因性に到達することはできず到達をめざすことしかできない」という核心を採用して、物自体という考えを放棄する立場に立って、番号づけをして要約を記した。カントの文章(01)で細い実線を引いたところは、そういう見方に相当する。

しかしカントは、(01)で波線を引いた文章のような考え方を導入して、実線を引いた文章の表わす考えを超えて、現象とは異なる物自体があると主張しようとする。すなわち、

感覚界における発端も終端もなく連鎖をなす直感の系列ではなく、それとは異質の概念の系列を提唱しようとする。

カントは、直感の系列をなす現象の限界の外に「物自体」のある可想的な領野を考えて、

(02)—— …一つの状態をその原因から導来し、或いは実体そのものの偶然的な現実的存在を必然的原因から導来すること（をめざす）。（そうすれば、）条件は、条件つきのものと共に経験的系列をなすことを必ずしも必要としない（と考える）。

すると、我々が当面している見かけだけのアンチノミーには、それから脱出する一つの道が開かれている（と主張する）。それは——互いに矛盾するこの両命題は、それぞれ異なる関係において同時に真であり得る、ということだ（と主張する）。（そうすれば、）感覚界における一切のものは偶然的であり、従ってまた常に経験的に条件付きの実在性しかもたないにも拘わらず、系列全体について非経験的な条件、即ち無条件的に必然的な存在者が考えられるのである（と言いえる）。かかる必然的な存在者は可想的条件であるから、経験的系列の項としてこの系列に属するものではない（だろう）、この必然的存在者は、全感覚界をそっくりそのままに、—— 経験的系列の全項を通じて経験的に条件付きの現実的存在のままにしておくだろう。それだから、無条件的な現実的存在を根

底に置くこのような仕方は、前項で述べた（自由の）経験的に無条件的な原因性とは次の点で異なっている。即ち自由にあっては、物そのもの[自由な原因としての人間]は原因(現象的実体)として条件の系列に属し、この物の原因性だけが可想的なものと考えられたのであった。ところが今度の場合には、必然的存在者（超世界的存在者）は、まったく感覚界のそとで可想的なものと考えられなければならない、こうしてのみ必然的存在者は、一切の現象の偶然性および依存性の法則に従うことを免れるのである。

と考えようとする。

そして、理性の統整的原理が次のように表現される。

(03)——すると理性の統整的原理は、我々の当面の課題に関しては次のようなものになる。感覚界における一切のものは、経験的に条件付きの実在性をもっている、——感覚界においては、いかなる性質も無条件的必然性をもたない、——我々は条件の系列に含まれているどんな項についても、その経験的条件を可能的経験に求めまたできるだけこれを尋ねなければならない、——なんらかの現実的存在を、経験的系列のそとにあるような条件から導来したり、或いは現実的存在を系列そのものにおいて絶対的に自存すると見なしたりする権利を我々に与えるようなものはまったく存しない、とはいえ条件の全系列がなんらかの可想的存在者のうちにその根拠をもち得るということは（それだからかかる可想的存在者は、一切の

経験的条件に拘束されない、むしろ一切の現象を可能ならしめる根拠を含んでいるのである）、これによって否定されるのではない、—— これがこの場合における理性の統整的原理である。

カントは、(01)～(03)で、現象とはまったく異なる物自体を提起したのと似た考え方で、現象界における現実的存在はいわば偶然的な存在者にすぎないとし、その偶然的存在に必然的原因を付与する必然的存在者を定立しようとする。しかも、その必然的存在者は、可想的でありながら（あるいは可想的だから）経験的系列の外にあって、どんな条件にも拘束されない超世界的存在者のように想定する。すなわち、その可想的存在者は、条件の全系列の根拠となりえ、どんな条件にも拘束されない世界を超えた必然的存在者である、と考えようとするのである。この考え方は、ここまでわずかずつ論理の跳躍を重ねてついに到達したものだが、わたしには、カント自身が戒める超越的なものだと思われる。「カントはこっそりと神を再登場させている」とするニーチェの感想は、(01)～(03)のような論じ方から生じたのだろう。

ところがすぐに、次の段落でカントは、

(04)——こう言ったからとて私は、或る存在者の無条件的に必然的な現実的存在を証明したり或いは感覚界における現象の実在に対するまったく可想的な条件の可能をこの証明の上に確立する積りはない。むしろ私は理性に制

限を加えて、理性が経験的条件という手引きを捨て去つたり、或いは具体的に示され得ない超越的な説明根拠のなかへ迷い込んだりしないように配慮すると同時に、

(原文では改行されないが、文脈は転調するので行を改める)
他方では悟性のまったく経験的な使用の法則にも制限を付して、この法則が物一般の可能を決定したり、また可能的なものはたとえ現象の説明には使用せられ得ないにせよ、それだからといってこれを不可能であると断定したりすることのないように気をつけるだけである。

要するに私が上述したことによって示そうとしたのは、
— 一切の自然物とその一切の(経験的)条件との全般的な偶然性は、たとえまったく可想的にもせよしかし必然的な条件を我々の意志に基づいて前提することと十分に両立し得る、したがってこれらの両主張の間には真の矛盾というものはあり得ない、それだからまたこれらの主張は双方共に真であり得る、ということにほかならない。
かかる絶対に必然的な悟性的存在者は、それ自体不可能であるかもしれない、しかしこの存在者は不可能であるということは、感覚界に属する一切のものの全般的な偶然性や依存性からは推論できないし、また感覚界における系列のいかなる項をも— それが偶然的なものである限り、— 最高の項とみなしてそこで停止することなく、飽くまで世界のそとに原因を求めることを建前とする原理からも、とうてい推論せられ得るものではない。理性は、

経験的に使用される場合には自分の本来の道を行き、先驗的に使用される場合にはまた自分の特殊な道を歩むの
である。

と言う。この(04)の論述は、相容れがたい考えをなんとか両立できるように複雑に屈曲して説いて、明快さを欠く。この晦渋さがニーチェをいらだたせたにちがいない。わたしには、(01)～(03)の推論で超越をしたのではないことをなんとか弁解しようとしているように聞こえてしまう。

この項の表題は「・・・宇宙論的的理念の解決」だったが、その解決は(01)～(04)の論述でなされた、と考えているのである。つまりカントは、自分の哲学体系に「可想的」な「理念の領野」を導入架設することが「宇宙論的的理念の解決」になると考えていて、最後の仕上げ部分が(01)～(04)なのだ。

(01)～(04)に続いて、その論述をふりかえって、次の文章が置かれる。

(P1)—感覺界は、もともと現象しか含んでいない、しかし現象は單なる表象であり、そして表象には常に感性的条件が付せられている。我々はここで物自体を我々の対象としているのではない、従って我々が経験的系列のなかの一つの項から— この項がどのようなものであるにせよ、— 感性の連関のそとへ跳躍する権利をもちえないのは当然である。もしそのようなことをしたら、单なる

表象をあたかも物自体であるかのように見なすことになるだろう。物自体ならば、現象の先驗的根拠とは無関係に実在するだろうし、また我々が物自体の現実的存在なるものの原因を経験的系列のそとに求めようとすれば、我々はかかる先驗的根拠を棄て去ることになるだろう。偶然的な物についてなら、確かにそういう結果にならざるを得ないだろうが、しかし物の單なる表象についてはそうはいかない。表象の偶然性はそれ自身現象にすぎないし、またかかる偶然性が関係し得るのは、現象の規定するところの背進、換言すれば経験的背進に他ならないからである。ところでもともと現象だけしか含んでいない感覚界について、その可想的根拠を考えてみたり、またこの根拠を現象の偶然性に無関係であると考えたりすることは、現象の系列における無制限な背進とも、また現象の全般的偶然性とも矛盾するものではない。これがかかる見せかけのアンチノミーを解決するために、我々のなさねばならぬ唯一のことであった、そしてこのことは上述の仕方でしかなされ得なかつたのである。およそ条件付きのもの（現実的存在に関して）に対する条件が常に感性的なものであり、またそれだからこそ経験的系列に属しているとすれば、かかる条件そのものもまた条件付きのものである（第四アンチノミーの反対命題が明示しているように）。そうすると無条件的なものを要求する理性が陥いったところの矛盾は、矛盾のままで存在せねばなら

ないか、それとも無条件的なものは(経験的)系列のそとに、即ち可想的なもののうちに置かれねばならないか、二つのうちのいずれかであるということになる。なお可想的なものの必然性は、経験的条件を必要とするものでもなければ、またそれを許すものでもない。従ってこの必然性は、現象に関して絶対に必然的である。

(P1)は、(01)～(04)で考えたことを別の表現で念押しする文章だ、と言うことができる。カントは、現象界の外にあるとする物自体に対応させて、(物自体と同じく)現象の外に可想的な原因性が存在すると想定する。そして、現象において条件付きの物を規定する条件をさかのぼって追求する背進が完結せず、現象界の物の存在は“偶然的”なのに対して、現象の外の可想的な原因性は無条件的だと考えようとする。現象とはちがうところに物自体があるとし、同様に現象界の外に可想的な原因性を想定し、その原因性は条件づけられたものではなく無条件的なものだとするのである。

現象を単なる表象と呼び、意味深長に聞こえる物自体という言葉と対比させて始まる文章は、その修辞によって、人間が現実に経験できる事物事象を軽いものと見なすように働く。しかし、冷静に判断すれば、ここに書かれていることはカントの要請である。わたしには、それを納得して了解することができない。この考え方についていけない。

この項の最後には次の文章が置かれている。

(P2)——まったく可想的な存在者を認めたからといって、そのために理性の（感覚界における現実的存在の条件に関する）経験的使用が影響を蒙るということはない。むしろこの経験的使用は、経験的条件の全般的偶然性という原理に従っていっそう高い——とは言え、やはり経験的な条件へ向かって背進を続けるのである。しかしこの統整的原則も、（目的に関する）理性の純粋使用が問題になる場合には、経験的系列のうちには見いだされないような可想的原因を想定することを不可能にするものではない。この場合に可想的原因は、感性的系列一般を可能ならしめるまったく先驗的な、そして我々には知られていないような根拠を意味するにすぎないからである。またこの根拠の現実的存在——換言すれば、感性的系列の一切の条件にかかわりなく、しかもこの条件に関して無条件的（絶対的）に必然的であるような現実的存在は、感性的系列の無際限な偶然性にいささかも矛盾するものではない、従ってまた経験的条件の系列において決して終結することのない背進とも矛盾しないのである。

最後に置かれた(P2)は、消極的な言いまわしで、何かを積極的に主張する文章というよりも、むしろ、言いすぎたところを弱める調子を帶びている。先ほど言ったように、わたしが納得できない理由がここには潜んでいるだろう。カントが積み上げてきた論述は、カントが確信して強く主張しようとすることではない、と考えるべきだろうか。

2.5 カントの宇宙論的理念の体系

2025年11月朔風払葉

海蝶 谷川修

